

魚群の魚種判別調査

酒井明久・西森克浩・井戸本純一・上野世司・上垣雅史

1. 研究目的

当场では、琵琶湖におけるアユの資源水準の評価手法として、1月から8月まで魚群探知機による魚群数の観測を実施している(湖中アユ魚群分布調査)。近年、ワカサギ資源の増加に伴い、魚群に同種が混在する可能性が指摘されているため、調査コース上に出現する魚群の魚種判別調査を実施した。

2. 研究方法

調査は2009年7月から2010年1月の間に延べ5回、いずれも昼間に魚群分布調査コース上(参考値の観測コースも含む)に位置する地点(水深約30m)およびコース外の地点(水深15m, 50m)において、魚群が観測された場所に複数の目合いの刺し網を設置し、魚を採捕することにより行った(図1)。

3. 研究結果

水深30mの魚群分布調査コース上では、同調査を実施している1月および7,8月には底生魚を除くとアユのみが採捕された(図1)。ワカサギは、7月に水深15m地点で、同調査を実施していない11月に30m地点で採捕された(図1)。したがって、1月から8月に水深30mの水域に出現する魚群は、アユが主体であると判断された。

4. 研究成果

ワカサギが増加した現在の琵琶湖においても、湖中アユ魚群分布調査はアユの資源水準の評価手法として有効であることが確認された。

